
裏見忘レタ吸血鬼ガ表ヲ歩ンダラ

@ホーム

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

裏見忘レタ吸血鬼ガ表ヲ歩ンダラ

【Nコード】

N6590U

【作者名】

@ホーム

【あらすじ】

かつて最古最強の吸血鬼“古の聖獣”に全てを奪われ吸血鬼化させられた少年が居た。そんな彼が、人間の居場所となった現代を生きてゆくヴァンパイアストーリー！。

1・深紅の葡萄酒

俺は眠い目を擦りながら、目の前の男の話を聞いていた。どうしてまた、わざわざこんな時間に奴はやってきたのだろう、と心底思う。

「聞いているかな？ 既に死者行方不明者が十名を超えてしまっているんだよ、多分、絞りカスみたいな死体があがるのも時間の問題だと思っただけだね」

彼は、手持ちのマイワイングラスに注がれた赤い液を凝視し、言った。ほんの僅かな皮肉か、ユーモアのつもりらしい。

こんな退屈で実りないやり取りは、俺の家の居間で行われていた。目が覚めるどころか、まぶたは重くなる一方だ。

というのもぐっすりと眠っていたのに、突然ベッドをノックされる。まあ、勝手にここへ入れる奴は一人しか居ないから、面倒臭そうに起きてやる。案の定、奴だった。

そして現在、俺と奴は机を挟んで向かい合っている訳だが……コイツ、くつろぎ過ぎじゃね？ との第一感想。

他人の家、他人のスペースで他人のソファアに深々と腰掛け、足を組み……マイワイングラスに他人の赤ワインを注ぎ、手で弄ぶ。借り物貴族めが！ 九割九分俺の財産だ。

「まあ、それは分かったけどよ……確証はあるのか？ また前み

たいに当てずっぱを探させる気じゃないだろうな？」

俺は言った。

「おや、体力には自信があるんじゃないのかい、アサルトブラック……いや、今は違うか、睦月^{むつき} 瑪瑙君^{メノウ}。まあ安心してくれ、今度のは間違いないし、行動パターンも割とハッキリしているから」

彼はワインをちびり、と舌に乗せる程度に含む。

「そいつはよかった。だがな、ここへ来る時間をもっと少し考えてくれ。ついさっきまで俺は寝てたんだよ」

「それは仕方ないだろう、君と僕では行動する時間が違うのだから。君がベッドに居る時、僕はデスクに居る、その逆も然り、だ」

まあ、確かにその通りなのだけだな。

「文句ばかり言うなら、給料査定にEをいくつも書いたげるけど？」

「待て待て分かった、俺が悪かった！ ちゃんと仕事はするし、文句も言わねえ。だから、査定の方は何とか……」

「ジョークだよ。命かけて働いてる君に査定なんて……そんな失礼な話があるものか。因みにランク付けもないからね、安定した収入は保障するよ」

ハア、なんだウソか。それを聞いて安心し……。

「ただし契約違反がひどい様だと、腕利きヒットマンを一個師団で投入するからそのつもりで」

……ようとしたけどダメだった。コイツの場合、今のしる査定にしる、マジな顔付きで神妙に、それこそ契約書にサインをさせたあの時みたいな調子で言うからなあ。

ジョークと本気の境を判別するのに、あと十年はかかりそうだ。

「では、貴重な睡眠時間を削ってごめんね、お話しもお開きにしよう。仕事の方はよろしく、朗報待っているからね」

と、奴は言い残し、部屋を出ていった。これでワインが奴の持ち寄った品なら粹な土産であろう。

俺は、俺のワインをコップに一杯、注いだ。

この街はすっかり住みづらくなってしまったなと、俺は改めて思った。昼も夜も大差なく網膜を焦がすのだから。

ヒトの作った灯りは、空に浮かぶ天敵程ではないにしる、見続けていると気分を害した。肌にもザラザラと、砂を擦り付けられているかの様な感覚に時々、陥ることさえある。

全く、昼は毒を反射し夜は自ら弱毒を生み出すとは、つくづくこの街は住みづらい。だからこそ俺には、肌と眼の保護が不可欠だっ

た。

「ったく、こればかりは、な……」

俺はそう呟きつつ、往來に行く。ここの通行は今日で五度目である。因みに四度目は僅か十分前だ。ウロウロウロウロ、行ったり来たり。

行く宛てなく彷徨う浮浪者が如く……それが現時点での俺の姿でありの確な表現だろう。

この外見が災いしてか、職質ももう三度程受けた。それでもその度、どうにか取り繕っては事無きを得た。ああいうときは逆に、自信満々に答えてやるといいのだ。

相手が、オイオイそれは、となれば儲け物。そこから素直に振る舞えばいい。その時のやり取りの最中は自信に満ち満ちた瞬間であった。いわく、

（ちよつと、そのアナタ。そう、アナタ、何してる人？）

（ああ、ケーサツの方ですか。やっぱ怪しいです？ このカッコ）

（言っちゃ難けどさ、相当に怪しいよ。そんな厚手のコート着て、サングラスに帽子でしょ？ ファッション以前の問題だよ。……で、君はどこのどなた様？ 身分を証明出来るモノ、持ってる？）

（実はボク、あのS高校の生徒なんです。ほら、あのインテリ系な高校ですよ。はい、学生証です）

（ん……ん？ むつき……これ、何て読むの？）

（むつき メノウです。ははっ、変わった名前でしょ、瑪瑙なんて。ウチの親は賢かったらしいから、子供の名前にまで意地張って、難しい漢字使ったんですよ。誰に対して優越感に浸ってるのやら）

（ふ、うん？ で、そのメノウ君が何してんのよ。こんな時間にこんな格好してさ）

（万が一にも知ってる奴に見つかったらヤバいんで、こっやって変装してんですよ。ぶっちゃけ停学モノですし）

（……正直だね、君。まあ、特別に今回は見逃してあげるけど、すぐに帰りなさいよ？ 次見付けたら補導しないといけないから）

（はいスイマセン、とっとと帰りますです）

こうして警官と手を振り合ったりして、俺は逃れたのだ。見事というほかないだろう？ ウソも方便、名前以外は。

って訳で、少し辺りを気にしながら夜の街を闊歩している。保護の為とはいえ、はた目には銀行強盗に入る直前の犯人にも見えているだろうな。

しかしこうまでして歩く理由は一つ、仕事だ。ある奴を見つけ接触する為である。出掛ける前に詳しく調べてみれば、連日テレビや新聞を賑わせていた事件らしい。

そしてつい先程、あいつの言っていた通りの事が起きてしまう。

ヒトの絞りカスが発見されたのだ。被害者の有様は、俺にすぐ連中の仕業だと理解させた。

余りにも露骨、かつ分かりやすい手段……まるで同業者を挑発してるかのような所業。まあ、その挑発に敢えて乗ったのが俺という訳だ。

こちらもわざと分かりやすくしたつもりであつたのだが、これ以上、お巡りさんに目を付けられるのもよろしくない。警察官一人一人はなんて事はないのだが、組織相手となると俺の生活を乱しにくる悩みの種になるからな。

おもむろにコートを脱ぎ、帽子を取る。途端に表皮を違和感が襲う。が、耐えられない程じゃない、たかだか蟻が行列で行き来する程度の感覚であり、噛まれる心配はない。

それでもサングラスは取らない。眼にくるのはちよつと、な。花粉症みたいになっちまう。

こうして脱不審者を果たしたのはいいのだが、かれこれ二時間ウロウロして痕跡の一つも見つからないのは何故だ。電車で足が痺れる程立ちっぱなしの結果が収穫ゼロじゃ、さすがに脱力する。

せめて対象の姿だけでも拝めれば……メールアドレスでも知ったりやすぐなのに。奴も全力で調べれば訳ない筈なのだが。

……と、前面に無表情を押し出して歩いていた時だ。匂いがした。

風に乗り漂うのは、ひどく甘い、菓子のような香り。こんなにも俺の好物の香りを濃縮還元し漂わせるのは、コトの後の奴しかおるまい。

匂いの発生源、道路を挟んで反対側の補導に、女が居た。

生涯を捧げた彫刻家が長い年月をかけ作ったかの様な、一点の曇りなき顔付き、雪の如く白い肌の上に、一輪の紅い唇が咲いている。つまりは、えらくべっぴんさんだって事だ。ぱつと見、二十とちょいってところか。

女は、アカデミー賞最優秀女優賞でも受けにいくのか、と言いたくなる格好だった。詳しくないが、パーティードレスとでも言うのだろうか、深紅の衣服や胸元に目がついて行ってしまう。

女もだが、彼女の後をフラフラと金魚のフンみたいに着いていく男ら三人が、より気になった。おいおい、あいつらもうやられているのか、そう思いながら俺はさり気なく次の横断歩道であちらに行く。

そうしている内、計四名の集団は闇の方へと消えていった。俺は適度な距離を保ちつつ、連中の消えた路地へと入る。

そこは都会の穴だ。人々は光り有る方へと虫の様に飛んでゆく。だが穴に、点々と存在する闇に惹かれるものは、ヒトの皮をかぶった何かだ。

それが分かっているから、俺は穴へと足を踏み入れる。ひやり、としたビル風が吹き抜けた。と同じに、風に紛れ何かが飛んできた。すぐに分かる、握りこぶしだ。

俺の目は瞬時に足の指先までを捉え、耳は風切る音までを聞いた。咄嗟に自分は踏み出でた。

頬をかすめ、腕が通過してゆく。俺はそれの外側から拳を、そいつにブチ込んだ。俗に言うクロスカウンターというヤツである。

さて、仕掛けて来た奴の顔ははつきり見えなかったが、手の感触がクリーンヒットを伝えて来る。そのままゴルフクラブを振り抜く様に一撃見舞ったのだ。

敵は顔面を中心に三度程回って、ゴミ箱にダイブ、おねんねしたらしい。更に、二つの影が闇に映る。人数が合致した。

「あー……お前ら、紙くず程の理性でも残ってるなら、今すぐ俺と来い。ダメならちよいと痛いかもだぜ？」

一応、言っておく。闇に警告色が四つ輝く。やっぱりもうダメか、それを確認するや否や、俺は駆け出した。

手遅れとはいっても、最初の奴の様子だと、未だ馴染んでいない風だった。つまり、身体のスベックを把握し切れず振り回されていると読んだ。

いくら自分が人外に成り果ていようと、人外相手に力を行使する経験が乏しいなら意味はないのだ。その証といってはナンだが、ちよいと本気で行けばパンチキックの一発ずつで終わっていた。

「準備運動は仕舞いだ、おいつ、出てこいよお姉さん。さっきこ

こに入っていったの見たんだがな」

俺は、この異様な場所そのものへと話し掛けた。この路地にはまだ、甘い香りが漂っている。絶対に聞こえている筈だ。

“ あらあら、お姉さんっていうのは褒め言葉？ それともジョークかしら？ ”

やはり、まだ居る。細い隙間に女の声がこだました。俺は周りを注意深く見回す。これなら、女がノミサイズであつたとしても不意をつく事は出来ないだろう。

事実、さっきのした三人の呼吸リズムや心音もハッキリ感じている。あらゆる備えは万全だ。さあ、どう来る？

“ ヤル気みたいね、それも相当に。でもどうしよう、期待に応えるべきなのかしら、がつつき男さん ”

「 なんだよ、アンタは草食系男子派か？ 今、流行ってるんだってな 」

“ まさか、男は肉食であるべきだわ。消極的で女に言わせる男って最低ね ”

「 なら俺とどうだ？ きつとアンタ好みのオオカミだと思うんだが 」

“ 検討しとくわ ”

ウソだな。そう答えた女に、少なくともその気はない。あつたと

しても僅かだろう。因みに俺も、そちらの世話になるつもりなど微塵もないのだ。

「でも……突くのは私」

声が、ハッキリ響く。音一つなかった。そして視界に映らず感じられなかった。後ろだ！

気付いた時は既に遅かった。剣山が如き無数の針が、俺の肉体の至るところを貫いたのだ。

2・穴色ジンジャーエール

振り返り様目にしたものは、灯りをバックに立つ女と、形を崩した彼女の影だった。その刹那、影の剣山に俺は突かれたのだ。

質量無きものが向かって来るのではどうしようもなく、びっしりと穴を穿たれた。シャワーのノズルみたいに血が吹き出すのを想像する。

ところで、拷問器具であるアイアンメイデンをご存知だろうか？あの女性を型どった棺桶状の入れ物で、中に入るのは無論、ヒト。

開閉する扉の裏には無数の針。蓋を閉じればおしまい。何が言いたいかといえbaumり、現状はそれを喰らったのにも似ているのだ。

一斉に針は引き抜かれる。が、敢えて外したのか、血は吹き出す事無く、ゆっくりと染み出している様だ。そう感じた。

眼球は穴になってるから見れない、見ようがない。にも関わらず、俺は気をゆっくり沈めた。

「ほほっ、まだよ。まだ死なせてあげないわ。私のご馳走だものね」

女は言った。こつ、こつとヒールの音が、静寂の内に響く。どうやらコイツは一撃で決めず、なぶりいたぶって、じつくりと恐怖させる。そして悲鳴と恐れを前菜にするタイプらしい。

それで助かった。さすがの俺も、心臓と脳ミソを直接やられていたら、どうなるか分からなかったのだ。が、あらゆる筋肉は使い物になりそうもない。

どこの神経もキレイにぶつつり寸断されてるらしく、脳からの信号を受信出来ないのだろう。恐るべき正確さだ。

こつ、こつ。だんだんハッキリしてくる。

「さあて、ではあなたを頂くわ。美味しかったら特別にペットにしてあげる、世界中の誰よりも私に従順なペットにね」

この女が俺に気のある美女だったなら、何ともそそる提案だろう。が、コイツの言うのは、それこそ操り人形の意である。

絶対服従、当然ながら拒否権利はなく、抱けと言われれば抱くし、死ねと言われたら死ぬ。そんな関係でしかないのだ、マスターと従者なんぞは。

こつ、こつ……。止まった。もう、すぐそこに居るのだろう。

「じゃあ、精々美味しく味付けをして頂戴」

俺は静かにその瞬間を待った。喚いて肉を柔らかくしてやる気もないしな。誰かのセリフで、悲鳴と絶望は最高のスパイスだ、つてのがあつたろう？

かああ……と、独特なあの音が、鼓膜を微かに震わせた。

それがキてからすぐに、首筋を貫くものがあつた。甘い香りが、一気に鼻腔に侵入する。痛みはなく、むしろマッサージでも受けているような心地好さ。

ヒトはこの快樂、拒める筈もないだろう。実際は二本の尖つた乱食歯が肉を食い破り、血管を探り当てポンプの様に液を吸い上げる行程だというのに。

この時こそ、待ち侘びた瞬間だつた。

「えっ……!？」

女は、頭の中を疑問符でいっぱいにした事だろう。俺の腕は、さながら大砲の砲弾が如く拳を発射した。彼女は不意を突かれ、コンクリート壁に激しく叩きつけられたのだ。

ただの人間が今のをもらっていたら、保ちはすまい。それで人生に幕を下ろしてた。つまりは、動く女はその限りでない。

とはいえ、ダメージは受けているらしい。短く呻き、その場に膝を付く程度には。

「あなた……私とご同類？ 味が、変だつたわ」

俺は、首筋を女に示してやった。二つの、刻印とも言つべき傷痕は、既に蚊にでも食われたかの様になっている。目を、かっと開くもう、見えていた。

再生能力……俺の身体の傷は、すぐに跡形もなくなる。何故ならば……

「お前と俺はご同類だ。不味かったろ」

「ええ、とつても！」

女の影が揺らめく。俺の直感が告げる、またあれが来ると。

しかしネタのわれた手品で人は驚かない。咄嗟に後方へぱっと飛び退いた。俺の周囲は闇と化す。女の針は、俺の飛び込んだビルの影と同化し、消えた。

川の支流が本流と合流し大河となる、それに似ている。やはり、影は光があるからこそ存在出来るものなのである。

「影使いの難点はそこだ。仲良しの筈の影と相性が悪いんだからな。自分の影しか操れないんだろ？」

したり顔で言う俺。

「まあ、そうね。便利なようでも不便もある。でも、そんなものでしょう、便利なだけのものなんてないわ。重要なのは如何にしてメリットを伸ばすかって、私は考えているの、例えば……」

影が女の周囲に伸びてゆく。細長い一本一本の針を伸ばす彼女はイソギンチャクにも見えた。だが、この影の内に居る限りは、俺の安全は保証されているも同然なのだが……。

「ごちゃごちゃしてるっていいわ、事欠かないから」

事欠かない？ 何だ、何がだ……その言葉の示すところを思案し

ようとした。が、そんな時間くれる訳もなかった。

飛んで来たのだ。何がって？ そりゃイロイロ。あの影はどうやら刺すだけじゃなく、掴む投げるが可能な様だ。初めてのタイプだ。

空き缶に残飯、何かの木箱だとかコンクリート片、殺傷力こそ低そうではあるが、当たると嫌なものばかりだ。

どん、と一際大きく物音がした。見上げると、ビルディング屋上で明々と輝いていた看板が、ゆっくり落下を始めているではないか。影が、壁伝いに伸びていたのだ。

いくら傷の治りが早くとも、やはり痛いのは嫌だ。降り注ぐそれらにも不動で待ち構えられるなら無敵であろうが、俺は安全地帯を自ら脱した。

その瞬間からである。影の猛追撃がスタートしたのは。立ち止まればそれ即ち串刺し。穴だらけ。そりゃあ本気にもなる。

影から逃れる俺は、百メートル走の世界記録保持者だ。それもタイムを大幅に更新した、な。

目にも止まらぬピッチ走法。多分、お気に入りのスニーカーは熱持ってる、もう少しすれば溶け始めるかもしれない。頭が横に下に向いたりもした。狭い路地を風の様にすり抜けてゆく。

影が背後で、コンクリートを貫く。下手な武器なんぞ比にならない破壊力。

「くっ、このっ、すばしっこい奴ね！」

俺がボロ屋の外壁を走る頃だったか、女が吐き出す。どうやらだんだん本来の姿が見え隠れしてきたらしい。思い通りにならない時は、人だろぅが化け物だろぅがメッキの仮面は剥がれ落ちてゆくものなのだ。

もうそろそろかと、伸びる影を見て俺は思う。先細りしてゆく針を睨み、俺はふと足を止めた。路地のど真ん中に立つ。

針が奔る。だが……俺の、元通りの眼球、僅か二ミリも手前で影は止まった。髪の毛程の針を見て、口元が思わずゆるむ。

「なん、で……？ 何故っ……」

「影使いの難点その二は本人も知らなかったらしいな。お前の身長と体型、光源から考えると、こんなモンなんだよ」

そう、影使いは自身の影を自由自在に操る。が、それはあくまでも自身の影の大きさまでの自由だ。つまり陽の高い内は最も弱体化する存在といってもいいだろう。

「まさか、それを見越して……あなたは一体……！？」

思い切り格好付けて、具体的には片方の爪先を相手に向け、半身に推移し人差し指をビシッ！ 視線鋭く彼女を射ぬき一言。

「しいて言うなら、お前よりもオッサンだ！」

女は、はあ？　と言わんばかりに首を傾げた。ちよつと難しかったか……お前よりもオッサン〃化け物経験が長い、と言いたかったのだが。

とはいえ決め台詞も言った。後は幕引きだけである。自身の自信を砕かれてはもう、正常に戦えまい。

俺はもう一度アスファルトを蹴ると、相手目がけて一直線に飛び出した。女は直後異変に気付き……気付いたけれど、もう遅い。伸び切った影を一旦縮める動きを入れなければならない。

それを完了する前に、俺の拳は女の腹を確実に一発、穿っていた。

「ほら、一応解決しといてやったぞ」

俺は、目の前のソファーにて、マイグラスでジンジャーエールを一杯やる男に言った。彼は一口、ちよびと唇を濡らす程度に含んだ。全く、一気に飲んじまえばいいものを。

「ご苦労様。さすがは瑪瑙君だ、素晴らしいよ。これで取り敢えずの平和平穏平常は保たれた、いやあめでたい」

と、コイツは言葉を挟みまた、ジンジャーをちびつ、と含む。苛ついて仕方がないんだがな。

「目には目を、歯には歯を、毒は毒を以て制す、ハムラビ法典じ

やないけどさ、君ほどこの言葉が相応しい者もないよ」

「皮肉かよ？」

「いいや、これ以上ない讚美のつもりだ。最強の毒、猛毒、それが君だよ。僕が全面的に信頼し、壺から玖までを頼りにしているんだから」

イチからクまでをねえ……なら十になったらどうする、とも考え
たし言いかけたが、相手は一応スポンサー、というか俺の生活保護
者だ、機嫌を損ねられて査定が現実になりでもしたら面倒だし、黙
っておく。

「ところで……あの娘はどうしたんだい？ 助平な君の事だ、自
室に連れ込んで存分に味わっちゃったのかな？」

「まだ手は出しちゃいないぞ。それに助平とは失礼な、俺は紳士
かつフェミニズム寄りの男だ」

実際問題、こうやってジョーク混じりに会話をしているのだが、
今現在まだ陽は傾きを見せず影もようやく伸び始めた程度の時間帯
である。

あの女は眠っているだろうし、俺も実は眠くて仕方がないのだが
……。

「ま、いいや。後はお好きに……ありがとうね、君もしんどそう
だし、僕はこれで……」

「あ、待て！ あの三人はまだ、間に合っただろうな？」

俺は最後に背中に問うた。あの三人とは無論、女に噛まれ傀儡となっていた三人の事だ。

「まあ、僕としても杭を刺したり十字架押し付けたりするのは胸が痛むからね、最善は尽くすさ」

奴はそう言うと、思い出したかの様にジンジャーエールを飲み干し、ウチを出ていった。

ああなつた以上、奴に頼るしか術がないのだ。何となく嫌だ。果たして彼らを元の生活へと帰してやれるのか、その原因を作れる存在が手をこまねいているとは。

が、今は何といつても瞼が重い。

俺はよろよると自室に戻る。ドアを開けた先には二つの、俺達にとってのゆりかごがあつた。片側の漆黒のゆりかごを開いてみれば、青白くも美しい顔が、すうすうと寝息をたてている。俺が、連れ帰った女だ。

彼女の表情を確認した後、蓋を閉じ、一本の白銀に輝く紐で軽く縛った。

そうしてから俺も自分のゆりかごへと入った。ゆっくり蓋を閉じる。目覚めまではあと六、七時間といったところか。

俺は目をゆつくりと閉じた。二つの棺桶が、密室に並んでいた。

3・鈍色ウォッカ

さてそれは今日の午後七時を回った頃だったか、俺が丁度目を覚ましたタイミングだった。ちよつと起きがけに小腹が空いていたから、人工血液でも一杯やろうかと考えてた。

ドスンッ！

どう考えてもネズミやネコ程度の仕業でない物音が、俺の部屋から聞こえてくる。起きたか、と俺は思った。

階段を登り、二階の自室扉をそつと開く。気分は物盗りだなこりゃ。部屋の中は他人じゃなくともどんよりしていると感じる。

カーテンは常時閉めきられ、照明は快適さと節電を追求した為常時オフ。常闇の間だ。部屋の中央に設置された棺桶は、俺専用のベツドである。

それに並んでもう一つの棺桶……が今、ぴょんと蛙の様に跳ねた。そして、ドスンと着地。うん、騒音の原因は紛れもなくコイツだ。

俺はばたばたと暴れまわるゆりかごを体重で押さえつけ、外周に巻かれた白銀の紐をほどいた。

途端に蓋が跳ね上がり、それごと俺は天井に勢いよく、それも頭から突撃してしまう。恐らくは、中身が内側から蹴りつけたのだから。

がらがらと落下する蓋に俺に……を尻目に中身、影使いの女吸血鬼は、獣のように鋭く起き上がった。

彼女はキョロキョロと辺りをとろんとした、半開きで眠たそうな目で見回し、やがて鼻をつまんで一言。

「くさい……ゴミ溜めかしらね？」

開口一番、他人の部屋を……ゴミ溜めだあ？

「いてて……そいつはあんまりだな。一応ここ、俺の私室なんだが」

俺の声に、女は実にゆつくりと振り向く。昨日とはえらい違いだな……実は寝ぼけているだけじゃあるまいな……？

「……成程、どうやら私は大声で助けを求めるのがいいみたいね」

「まあ落ち着こうぜ、ちよいと俺と話をしよう」

「悪魔は巧みなる言葉と甘美な誘惑で心の臓を掴みたり……そうやって少しずつ外堀を埋めてゆくよね。でも、私の外堀は日本海溝より深くてよ」

もはやそれは外堀じゃないな、うん。

「ならひとつ飛びすりゃいい。いくら深くても飛び越えちまえ
ばいいんだ」

「あら、そういえばそうね。……いいわ、話を聞こうかしら」

よし、何だかよくわからんが、まずは第一段階を完了した。話さえ出来れば、大概の女は乗ってくる。

「んじゃ、まず聞くが……お前、自分を何だと思っている？」

まずは理解力の確認だ。どうにも彼女は能力の把握がイマイチだったり、派手にやり過ぎている事から、新参者である可能性が高い。とはいえ昨日の戦いぶりといい、三人を傀儡としていた事といい、知らなかったなんて事は絶対ないだろう。

ただの人間でなくなっている。その代わり、万能な存在……中には吸血鬼となった瞬間に自分が神に等しきものとなったと勘違いする輩がいる。盲信せず冷静に現状を捉えているか？ その部分だけで、後々が大変か楽かが決まる。

「……私は人じゃなくなっただんでしょう？ 多分、あなたと同じ吸血鬼なのよね？」

「何故そう思う？」

「だって私、血が欲しくて堪らなくなる時があるわ。これまでは水か、それともお茶、喉が乾けばそれで潤っていたのよ？ それが急にあの、どす黒い体液が無性に欲しくなった……初めは、そういう病気なんじゃないのかと思ったわ。実際にあるもの。でも、そんな事はなかった。……ところで私、二週間位前からかしら、とてもモテる様になったの、自分で異常と分かる程に。だって変でしょ、異性も同性もなく一言二言交わしただけで、一目惚れです、っていうのが一日に多い時で十六回もあったんだもの」

俺は慎重に一言一句を聞いた。血が欲しくて堪らなくなる……それはそうだろう、血液とはヒトにとっての水にも等しいものだからだが厄介なのは、水分ならば水気を含む商品で、干物でもない限りは殆どのモノからそれを吸収出来る。しかし、血の代替品は今のところない。血は血なのだ。

聞いた話には、トマトジュースや、魚であるところのイワシで代用の効く個体があるらしいが、それはごく一部の例外だ。

大半の俺達は、ヒトの身体を流れるそのみを糧にして生きている。今でこそ人工血液なるものがあるからどうにかなっているが、それが生まれるまでの間は常に犠牲が付きまっていた。

かく言う俺も、数千、もしかしたら五桁にとどくかもしれない数の命を糧に生きているのだ。

後者であるところのモテるとは、無意識下での魔眼とでもいうべきものの発現だろう。目を合わせるだけで相手を意のままとする邪眼程、強力無比なものでないにしろ、対象の内面性を僅かに弄る事は可能である。

つまりは、感情を操り自分に対し好意を抱かせる。発情させる。抗おうとすれば抗える程度のものであるうが、この女の造形は一流だ。何たら48というアイドルグループに居てもトップクラスの顔付きである。

すれ違い様にでも、“おっ、いい女”と思い一瞬でも目を合わせら最後、一目惚れを魔眼が後押しする結果となる。

「それだけじゃないの。言い寄って来る連中、いい加減しつこいから、そんなに相手して欲しいなら血を頂戴って言ってやったわ。そしたらあいつら、何て言ったと思う？ いいよ、って言ったのよ。だから私は吸ったわ欲望の赴くまま、アナタにやったみたいに首筋にこの牙を突き立てて……すぐに口の中が甘い鉄の味に変わったわ。こんなに美味しいもの、今まで口にした事がなかったのよ」

俺は、女が体験したであろう状況を少し想像する。すると、いつもあいつが現れた。一点の曇りもない澄んだ笑顔で俺にこう言う、少女の姿。 “ いいよ、私の血をあげる ”

クソッ、思い出したくもない事を！

「血を吸う時ふと、このヒト、痛そうだなと思ったわ。でも、牙が肉を破って食い込んでいるのによ、彼はまるで天国のただ中で幸せを噛みしめているみたいだった。とろんとした、気持ちのよさそうな穏やかな顔をしていたの」

それはそうだろうな。……蚊って生き物がいるだろう？ あいつらがヒトの血を吸う時に痛みを感じさせないように、吸血鬼もまた吸血の際、不快な感情を与えさせないらしい。

俺も詳しくは知らないが、ヒトの脳を独特の体臭、フェロモンにも似た香りで麻痺させ、痛みを快楽に、おぞましい行為を拒むべきでない行為へと変えてゆくのだ。

ちょっと例えが悪いが、性交みたいなものだろう。子孫を残す行為へ快楽を加える事で拒ませないように、だ。

「吸血した男達は、とてもおとなしくなったわ。生気が失せた……いいえ違うわね、自分の意思を持たなくなったのかしら？ あんなにキラキラ輝かせていた視線も、まるで宇宙を眺めてるみたいだった。……ああ、私が終わらせたんだって、凄く冷静に受け止めたわ。何て言ったらいいか、彼らを私が支配したんだなって、そう思えた。私のお願ひした事をそつなくこなしてくれたわ、それこそ世界中の誰よりも、私に誠実に、従順に」

「それで、嬉しかったか？」

「いえ、寧ろ悲しかったと思う。何も出来ないあの人達の生き甲斐つて、私だけになってしまったんだなって感じたわ。彼ら、まるで赤ん坊の様。私が守ってあげなければと思ったのかも。私が」

あの時、そう俺が彼女を追い掛けていた時に男らは多分、自分の紙切れ程の意思でそうしたのではなからうか。自分達の命よりも大切な主人に危機が迫っているとあればこそ、奴らは動いた。

そして俺が倒してしまった。だから、女はいきなり俺を刺して来たのではなからうか。主人と従者の関係は傀儡以上でも以下でもない。が、この女は果たしてそうだったのか……？

あの男達に対しての母性愛に似たものが少しでもあったから、苛立っていた。どうやらそれが正解だろう。

案外、悪い奴ではないみたいだ。従順なペット、ペットか……奴らに手を出した俺は、正しくそれにするつもりだったんだな。

「もういいかしら？ 洗い浚い話したし。……それで、私はやは

り化物なのかしら？」

「いいや、お前はヒトらしい。最初は疑ってたがな、今の会話には理性があった。お前はまだまだヒトさ」

「そう……なら私は、血が好きな影を操れる、傷もすぐ治るヒトって事でいいのね？」

「ああ……ところで、ここからは個人の話なんだか、お前、今いくつだ？」

「それは何について？」

「歳だよ歳、年齢だ、他に何があるってんだよ」

「いえ、さすがに出会って間もない私に、スリーサイズ聞いて来るほど痛いヒトじゃないと……ちよつと安心したわ」

「そりやどうも。興味はあるがな」

「正確な寸法を把握している訳がないでしょう？ 知ってる方が気味悪いわ」

「俺の見立てだとな……むむむっ、上から……こりゃあ見事だ、九十はあるな。それで次は……」

「十七よ」

「はっ？ なんだそりゃ、かのエリザベス女王でもそんなウエスト……」

「歳の話でしょう？　そこを間違えない事ね」

「って……待て待て十七って事はだぞ、お前高校生か！？」

その顔付きと、長くすつと伸びる黒髪、出会ったときの大胆な深紅のパーティードレスに言葉遣いとかが、いろいろを判断材料にして考えてだぞ、二十ちよいは Teppan だったハズだ。

しかし、十七？　現役女子高生！？　JK！？

そりゃあ一日に告白が何十件とあってもおかしくはない。男子高校生といえばアレだ、中学生に毛が生えただけだぞ？　飢えた獣同然だ。

そんな学校という名の猛獣檻に、全てがA級以上でまとまっているコイツを放り込めば、それだけで大変な事になる。

潜在的にしろ気にしていた連中がわんさか居て、魔眼が獣を引き出した、という訳か。

「アナタこそ、私と大差ないんじゃない？」

「……俺か、いくつに見える？」

「どんなに多く見積もっても、二十が精々ね。普通に考えたら、高校生で十分通じるわ」

だろうな、童顔が自慢だ。だから警官に学生証見せた時でも通じ

てしまったのだし。で、実際はいくつか……それを言ったところで、果たしてコイツが信じてくれるかどうか。

「正解は？ まさか私に聞いておいて内緒とか言うんじゃないでしょうね？」

じと目、というやつだろうか。氷柱の様な視線が真っ直ぐに飛ぶ。

「いや、答えるさ。実は俺、もうかれこれ二千年は生きてるな」

「嘘ね」

「ウソじゃねえし」

「信じないわ」

「信じてくれ」

「証拠は？」

「ないけどよ、分かりやすく言うなら、鬼として阿部晴明と戦った事あるし、桶狭間じゃ信長公に味方して勝たせてやったし、幕末には新撰組に入ってた。太平洋戦争ん時は真珠湾でパールハーバーだったぜ」

「薄っぺら……知ってる単語繋いだだけみたいね」

「まあ、一部は過大解釈してるが……全部事実だぞ？」

それに対し、女子高生は明らかな嘲笑を浮かべ、言う。なんだ、

ちゃんと表情あるんじゃないか。

「ハイハイ分かったわ、アナタが十分に痛いヒトだって事がね……じゃあ、お世話になったわね、私はもうウチに帰るから」

JKの発言に、俺は腰が砕けた。足元が一瞬、本気で不安定になった……貧血みたいだ。

「はあっ！？ 待て待て、ウチへ帰るってお前、正気か？」

俺は一応、そうならない様に説得しようとしていたつもりなんだがな。途中からただの無駄話になってたけど……。それにしたってもう少しは考えるだろ！ なんなんだこのJKは。

「だってアナタ言ったじゃない、私はまだヒトだって」

曲解してやがった。

「心は、だ。肉体的にはもう完全に化物だ。……まさかお前、確証得た今でも元通りの生活に戻れると思ってるのか？」

「思っているわ。昨日の私はちょっと間違えただけ、それまで普通に生活してたんだもの」

彼女は……あつ、名前聞いてなかった、はそう言い残すと、外へ猛ダッシュ。あつという間に見えなくなった。げに恐ろしいきは吸血鬼の身体能力なり。

「やれやれ、とんだじゃじゃ馬じゃねえか！」

俺はお気に入りのスニーカーに足を通すなり玄関を抜け、闇の中へと消えていった。

4・浅葱色のウーソ

「ただいま」

私は玄関戸を開くと、そう言った。靴をゆっくり脱いでいると、居間から一人が現れる。その者は薄い頭髪に白髪の混じる、中年特有のスイカみたいな腹をした人だった。私の父だ。

「お帰り波音。^{なみね}随分と遅いが、何かあったのか？ もう少しで母さんが警察呼ばうとしてたんだぞ」

「別に、友達と遊んでたの。ちよつと、変な人にかまれたけど」

「変な人？ どんな奴に!？」

「大丈夫、蹴散らしたわ。それよりもお腹空いちゃった、お風呂は後でいいから先にご飯にしましょ」

昨日はから家に帰っていないはずであるが、外出したのは夜中であるし、朝は私が一番早い。なんとか誤魔化し切れているらしい。

因みに学校の制服は、ついさつき窓から侵入し着替えた。不自然なところなどないであろう。

さて、波音こと私はもう幾度となく通った専用通路をたどり、椅子に腰掛けた。

「あら、お帰り。何してたのよ」

「姉ちゃん、もしかしてコレと遊んでたのか？」

私の隣で弟は小指を立てつつ言う。コレ……多分、男と言いたいんだろう。ある意味では合っている。

「……冗談はよして一樹、そんな暇なんてないわ」

「でもよ……この前ガツコの奴らが、派手な格好した姉ちゃんそっくりの女を見たって言ってたぜ？」

背中が一瞬、ひやりとした。家族が寝静まる様な時間帯に窓から外出していた上、わざと精一杯派手に変装していたからばれるハズはないと踏んでいたが……最近の高校生と世間の狭さは侮れないものだ。

指名手配中の犯人も、こんな気分を味わうのだろうか？

「波音、お前まさか夜遊びしてるんじゃないだろうな」

「まさか、この目を見て。私が嘘を言ってる様に見える？」

そう言い、私はまばたき一つせず、しっかりと瞳を間近で見せた。

「いや、見えない」

「あつ、ああ……」

「はいはいどいて男衆！今日はすき焼きよー」

母はエプロンにキッチンミトン装備、という出で立ちで鍋を運搬してきた。既に新聞紙や広告がテーブル上に引かれている。ごとりと鍋が置かれた。

その中は満杯。鍋は素材らにとって人気スポットの様だ。茶色く日焼けした彼らはさぞかし舌の上で踊り狂ってくれるだろう。

さあ、全員が揃った。合掌、いただきますだ。次に卵を割り、取り皿へと投入、掻き混ぜ黄金のタレに。これにつけて食べるのが我が家のスタイルだ。

私も、卵へと手を伸ばした。まるで赤子を扱うかの様に慎重にだ。今の私ならば、力の加減を僅かにでも誤るとすぐに卵は破裂するだろう。

学校に居る時、実は鏡を一枚割り、屋上の手摺りをグニヤリと曲げてアートにし、極めつけは窓を閉めた際に脱線させ中庭に窓枠ごと落下させた。パワーが相当にアップしているらしく、人の規格を、つい、で破壊してしまうのだ。

未だに慣れはしない。日常生活に於いては常に警戒しなければならなかった。下手な事をして私が人外であると気付かれないだけなのだ。

私の日常はここにある。ここにあるべきものだ。壊させなどしない。

「よっ、と」

「もー、一樹っ、肉ばかりじゃなくて野菜も食べなさい」

「そうだぞ、野菜をしつかり食べやさいっ！　なんつって！　…
あー、でも父さんの分も残しときなさい」

早くしないと、私の肉が無くなってしまふ。因みにエノキダケも割と好きだ。あの群れてなければ気付かれもしない、ささやかさがいい。

そこそこに厚く、しかも柔らかな肉。私は素早く野菜らと共に確保する。リスだって頬袋パンパンに蓄める……関係ないけど。さて、肉に玉子をまぶして一度白飯の上でポンポン。これでご飯も進む。

そうして遂に、肉を口内へと放り込んだ。

ぐむぐむ……

「……？」

ぐむぐむむ……

「！？」

まるで、弾性を失ったゴムを噛んでいるみたいだった。自分は今、何を食べているのか……確認が必要な程に分からない。私は念の為、一言。

「ねえ……ちょっと味付け薄くない？」

「ん？ そんな事はないだろ、普通だぞコレは」

「むしろ濃い目だと思うけどね、お醤油入れすぎたかしら」

結論は出た。私だ、私の方が機能を失ってしまったているのだ。段々身体が変化してきている、ということなのだろうか？ だが、ただ、私は普通の女子高生なのだと呪咀の様に繰り返した。

おいしい、おいしいと感想を漏らしご飯と野菜を茶で流し込む作業は、あまりに辛いものだった。思ってもいない事を口にする大人は、よく忍耐が続くものだ。

結局私はむせてしまい、口に合ったであろう馴染み深い味を、半分も残し放棄せねばならなかった。お碗の白飯、白菜やネギらが怨めし気にこちらを見ている。多分彼らは、三角コーナー行きだろう……。

「ごめんなさい。ちょっと、食欲がないわ、ごちそうさま」

私はゆっくり立ち上がると、団らんに背を向ける。

「どうしたの波音、どこか調子が悪いの？ それともダイエット？」

「友達と遊んでて、お菓子食べちゃったから……」

嘘。しかもチープな。

「……そうか、ほどほどにしておくんだぞ」

振り返らずに、分かっているわ、とだけ言い、私は自室に引っ込んだ。

・

「困ったわね、コレどうしましょう……」

母は、彼女の食べ残しを見て言う。食べられないなら何もこんなに取りなくても、と呟きもした。

「俺が……」

「えっ？」

「俺が、食べとくよ、姉ちゃんの……」

「そっ、そう、助かるわぁ」

がつ がつ ぴちゃ ぴちゃ……

・

（ヒトじゃない。いつか自覚する日が来るとは思っていた。アレを口にしてしまった時点で、ヒトたる資格は剥奪された。もう、あの赤い液体の味しか分からないのだろうか？ これから先、いろん

な味を楽しむ事なく生きると？

どうして……こんな力を得てしまったのか。首筋には、以前より張りと弾力の増した表皮があるだけ。刻印はとうに再生してしまっただのだろうか、それとも元々こうで力が突然発現したのか。考えればキリがないが。

だけど私は、生きてみせる。ヒトの中で、これまでと何も変わらずに)

と、そこにコンコンと音が二回。これは扉をノックされた音だろう。波音、という名らしい彼女は、誰、と言った。

“俺だけど……”

一樹、とか言ったか、彼女の弟君だ。扉がゆっくりと開き、彼は部屋に踏み込んだらしい。

「一樹どうしたの？」

「姉ちゃん、俺……俺っ……」

過度の呼吸と動悸。彼はまるで犬の様だ。って、あのガキまさか……。

「姉ちゃんっ！」

「えっ……？」

次の瞬間、彼は実の姉へと獣が如く飛び掛かった。猛獣が、例えば百獣の王がハンティングするみたいに。しかし、その先は捕食で

はない。姉に強く抱き付いたらしい。

「一樹!? な、何を……」

「俺にも分からねえ、だけどっ、姉ちゃん見てたら急につ、急にこうしたくなっちまった!!」

（まさか、一樹っ!?!）

急な発情、それも身を焼き焦がす程の。姉弟である事すら忘れてしまう程の。彼女の、波音の魔眼が彼の欲情を強制的に増幅し引き出した……恐らくはまともに視線を合わせたな。

身体押し付け姉の香料に酔う弟。だが、姉の方もどうやらマズい、欲求を解放しつつある。

（ああ……見える、一樹の血の管が……なんて、きれい、なんて美しい、まるで宝石のよう。あの中を生命が流れているんだわ、一樹の命が……欲しい、私のものにしたい、あれを私のモノにしたい）

欲と欲、墮落への階段を確実に下りゆく二人に、俺は思わず言葉を吐いた。“止める!”と。それで我に帰ったか、二人はばっ、と身を離れた。

さあ、定番といこう。突如として開く窓。吹き込む猛烈な風が紙片を、物品を舞いあげる。……ここでコウモリの群れが突入し一ヶ所に集まって俺完全、といきたいが、生憎俺にそんな能力は無かった。

だから代わりに窓の外でタネも仕掛けもない空中浮遊、という訳だ。派手ではないが、不気味さなら飛び抜けてるだろう？

「止めとけよ。家族まで人形にする気が、波音ちゃんは」

俺はにかつ、と牙を見せ言った。呆然と見上げる二人。俺がエイリアンにでも見えるか？ 翼もなければマント姿でもない、まんま一般人の延長だぞ？ 尖った乱食歯はあるだけだ。

「……何しに来たの？ 化物」

「聞き捨てならんな、化物」

何を今更。お前さんが昨日した事、ご家族にも見せてやりたい。

「お前誰だ、姉ちゃんをどうするつもりだ!？」

弟君が、姉と俺の間に立つ。ほお、やっぱり男の子か、逃げ出さない分は評価する。将来はスーパーマンかもな。

「別に何も。ただな、姉ちゃんはもう俺と同じ化物なんだ。だから人間様にメーワクかける前に連れて帰りたいだけだ、分かるか？」

俺はばか正直に言う。今更取り繕った様な嘘など無意味だ。それは敵対心にじわじわ燃料をくべるだけだしな。

「なっ……何、訳の分かんねえ事を……」

「そうかい、なら……分かって貰うしかねえな」

俺は渋谷暗中のグラサン兄ちゃんみたいに凄味を効かせて言うと、黒い霧となり弟君へ殺到する。彼の目に俺本体は映らない、残像だけだ。

その時だ、暗黒が動いた。それは巨人の手みたいな型をした。波音の影だった。

それが横合いから俺をぶん殴る。身体は交通事故にでもあったかの様に吹き飛び、机上の物品を巻き込んで壁にぶち当たった。

おお痛え……刺すだけじゃなくてあんな使い方も出来るのか、と思わず感心した。だが使ったな、能力を……肉親の前で。その巨大な影の拳、見えないとは言わせない。

物音に反応してか、ドタドタとの足音。そして今、扉が開かれ二人の姿が現れる。オヤジさんとオフクロさんだろう。

二人は恐怖半分、興味半分で俺を見ている。全く、ありゃあ暴漢を見る目じゃねえか？ こっちは被害者だっつーのに。

俺はゆっくりと身体を起こし、再びの手品ショーだ。天井近くまで身体を浮かせてみせる。

「なっ、なんだ貴様はっ！」

オヤジさんは、ずいとは一歩前に出て言った。何とも立派なオヤジさんだ……中年太りも、薄い頭も刻まれたシワも、ヒトにとっては生きてきた証、積み重ねだ。俺達みたいな連中には縁なきものである。

「俺かい？ 俺はただの化物さ……だけどな、波音ちゃんもそうなんだよ。一樹とか言ったか、お前は見ただろ、姉ちゃんが化物の力使ったのを。お蔭で俺は擦り剥いた」

が、一樹君は何も言ってくれないではないか。肯定でも否定でもともかく何かを言ってくれよ！ これじゃ、ただの変な人みたいだから俺。

「意味の分からん事を言うなっ！ 波音は普通の高校生なんだぞ！」

「だとさ波音ちゃん、信じられてるぞ。でもな、正直になつとかないと絶対に後悔するぜ？ さっき、お前は弟に何をしようとした？ まだ知らんぷりか？ 甘えが犠牲を生むんだぞ！」

波音はこちらを見た。迷子の幼児の様な光が眼に灯る……何をどうしたらいいか、答えを他人にすぎる眼だ。ようやく自分の危うさを認識しつつあるみたいだな。

深い深い霧の中、それまでひよいひよい歩いていた道が、実は一歩踏み外せば断崖絶壁だ、と知ったらどうだろう。見えなければよかった、知らなければよかった？ 違うだろ。

「私、は……」

「本当にすまないとは思うが、娘さんをどうか俺にあずけてくれ。そうしないと取り返しのつかない事になる」

こつは言ってみたものの、当然ながら俺は見ず知らず、しかもヒトかどうかすら危うい存在。はいどうぞ、と回答する家族がここに居る？

居たとしたらそれは、とんだ分裂家族だ。いや、家族とすら呼べない何かの集まりだ。必然、彼らの反応はNOだ。

「うるせえ！ 姉ちゃんに手出しはさせねえぞ！」

「そうだ、とつとと帰れ！」

「警察呼びますよ！」

やれやれ……完璧に理解しろとは言わない。だが、少しは考えてモノを言っただけ。脊髄反射での会話は緩やかな思考停止だ。ならば、少々手荒になっちまうが、仕方ないか……。

と、俺が物騒な事を考えつつある時だ、波音の影が動く。視界の隅で動きを察知し、身構えたそれくらいだったと思う。

影は三つ又に分裂し、弟を、父を母を拘束した。丁度、映画アナコンダの有名なワンシーンみたいだ。

「もういいわ、父さん、母さん一樹……私は、化物だから」

俺はにやりと笑う。

「私はさっき一樹を噛もうとした。この牙で……吸血鬼に吸われた者の末路、知ってるでしょ？ 皆を守る為にも、私はその人に着いていくわ」

彼女は俺の方へと歩み寄る。俺は舞台上に観客を誘う手品師であるかのように、手を差し出した。月光のスポットライトが主役を蒼く照らす。

「待つんだ波音っ！ お前が例え化物でも、私は気にしないぞ、戻ってくるんだ波音ええー！」

口々に家族らは言葉を発した。悪魔がヒトを誘惑するような甘い囁きでも、神がヒトに天罰を下すようなキツイ言葉でもなく……ただの願いだった。

しかし願いは、彼女を苦しめるばかりだ。俺は悪役になるべく、彼女の手を引き、彼女の意識を奪おうとした。

が、彼女が先に、自ら手を下した。影はほどけると、ムチのようにしなり、家族を跳ね飛ばしたのだ。

「波音エエエエ！」

「波音ー！」

「姉ちゃああん！」

三重奏が夜風に消える。俺と彼女は既に窓辺に居なかった。カーテンが、揺らめいているだけだった。

俺は彼女をお姫様抱っこし、風となって帰路についていた。建物を屋根から屋根へと飛び、ウチを目指す。

俺は、一度だけ聞いた。

「悲しいか、化物？」

「……いいえ、化物」

5・夢色ソーマ

空が明るんでいれば活動し、暗くなれば眠れた。自由気儘な生き方の中に最低限刻まれたルール。

が、人々が眠る頃、それらは突如として現れた。夜の者、もしくは夜の使徒、ヴァンパイアである。奴らは夜闇に紛れ音もなく家屋に侵入すると、住人の首筋に牙を突き立てた。

人々は気付く間もなく、一気に体液を吸い上げられていったのだ。

瞬く間に、一つの集落が地獄へと変わった。炎が燃え盛る事も家屋が崩れ去る事もなく、また吸血鬼のなりそこないが溢れる事もない。

ただ、人だけが肉の日干しの様な無惨な姿に変わっただけ。触れでもしたら、そのまま崩れてしまう程に。どれだけ優秀な医師であろうと、死後数ヶ月以上としか診断出来ない状況だ。

「ふむ、我が眷属のみで滅びるか人間。存外つまらんな、知能が我らにも匹敵するというから試したが……肉体の強さは追い付いていない」

たった六匹の吸血鬼、その中央に立つ七人目の青年は言った。青年とはいうものの、それは見たままの形に過ぎない。もしも彼が気配だけの存在だったなら、年寄りにも感じられたかもしれないのだ。

周りの六匹などは最早、人型の何かだ。まるで犬か狼の様にわなないて、血の混じるよだれを垂れ流す。知性の欠片すら見いだせない有様だった。

「ああ、困ったな。……はは、お前達の悩みといたら、私の言葉に従わなくてはならぬ事だけだろう？ ほれ、座れ」

六匹は迷いなく座る。彼らは不満の言葉どころか、態度一つにも出さない。

「いいや、悩みすらない、か……そんなお前達がある意味羨ましくもあり、最大限に不愉快だ！」

エンシエント・セイントビースト、聖獣が腕を振るう。それだけが、眷属の内一体は、あたかも体内で爆弾が破裂したかのようにバラバラに千切れ飛んだ。

パーツはあちらそこに散らかったが、体液だけは時間が止まったのかその場に制止し、聖獣の手の平へと消えた。

「おや、おや。最近はどうにも気が短くていけないな……眷属とはいえ一応は生き物であった、生命を粗末にしてはならぬ」

吸血鬼らしい黒マントを引き摺りつつ、景色の変わらぬ集落を歩んでゆく。繰り返すが、ただヒトが動かなくなっただけなのだ。

「ん……？」

と、そこへ聖獣の目に一つの存在が映る。ヒトの未成熟体であった。身体も精神も成育し切っていないが、不純物少なく張りのある血を流す存在。

そいつは、ミイラの一体を揺すり、顔の上で雫をこぼす。母さん、母さんと呻いていた。

おやおや、そんなに乱暴にしていると……母上が壊れてしまうよ？ そう考えた直後、少年自らの手で肩を砕いてしまい、首がパサッと落下する。

五匹の眷属は、今か今かと合図を待つ。聖獣の気まぐれ一つで少年はたちまち貪られてしまうのだ。我先にと血肉を求めるのが、彼らの唯一と言っていい欲求である。

「止めよ」

鶴の一声。いずれの者も石像の様にピタリと止まる。指の一本すら動かさずに。

「丁度良い、幼少の体液は美味である。そして眷属も一匹減ったところであつた……本当に丁度良い」

聖獣は足音一つたてずに少年の背に肉迫した。事実、地面から僅かに浮いていた。子供はまだ、泣いていた。

ゆっくりと牙を剥く。人間が牛の肉を食す様に、牛が藁を食す様に、ごく当り前に牙は首筋を裂いた。

「あつ……」

一度だけ目の端で、子供は相手を見た。僅か数秒間で血液は吸い尽くされ、ぢゅうつつ、と最後の一滴までを飲み干して牙を抜いた。

少年は憐れ、人間の干物となっていた。が、未だ心の臓と脳は生きていたのである。聖獣は自身の指を牙を持って突き刺し、したたる血を少年の首筋に飲ませた。

ほんの二、三滴で事足りる。体内で獣は爆発的に増殖し、血管を流れ脳に心臓にと行き渡り、組織構造を丸々書き換えてゆく。あつという間に少年は元通りの潤いに満ちた肉体を取り戻した。

「おはよう、気分はどうかね？ 私の言葉こそが神の告げであるう。まずはそうだな、忠誠の証に跪くがいい」

眷属らは言われるがままに片膝を折り、片膝を立てて頭を垂れる。少年も同じだった、頭以外は。

「ほお……どうした、頭を下げよ、お前の神は私なのだ」

「だつ……誰、が……」

少年は知るはずのない言語で言っていた。ぐぐつ、と頭を持ち上げて、ついには聖獣と視線が交差する。

「ははハハハはハハッ、逆らうか、そうか、それもよかろう！遊んでやれ、お前達」

主の言葉に戒めを解かれた従者らは、少年へと殺到する。しかし、

戒めを解かれたのは少年も同じであつた。

一点に注がれる爪と牙の鋭角暴力、第一波を飛び退いてかわした少年は敵を見据え咆哮をあげた。地上の如何なる生物のものとも違う、吸血鬼の叫びだ。

眷属らは一瞬、主の咆哮を聞いた風に思考を停止した。その隙に少年は暗黒と化す。文字通りの闇、ブラックホールを人型に切り取ったなら、こうなるのではないだろうか。

闇に、二人の眼球だけは浮き上がっていた。

境界を失ったカラダで、少年は地を蹴った。たつたの一步において彼は五メートルばかりも跳び、眷属の一匹を突き抜けた。

そう、突き抜けたのだ。従者は末端部のみを残し、地面に五回落ちた。しかも残された手足や頭のパーツはすぐに砂の様な細かな粒となり、風に吹かれ飛んでいった。

彼の暗黒が、胴体を喰らったのだ。

「ほオ、これはこれは……」

着地。地に二本のラインを描き、停止。足の裏が焦げ臭かった。

背中を即座に眷属が襲う。

「うがぁおおおアアアアア！」

敵が接近する間、少年は転換、血の様な目玉が敵を捉えていた。本能が震える、戦え、戦え、砕け、壊せ！と。

闇の拳が真つ向から眷属を突いた。敵が地面だったなら拳は鋭利なドリル。削りとられたのか、眷属は触れた先から消滅していった。

死の霧……彼は細かい粒子の集合体にも見える。身体は不安定に揺らぎ、うねり……人々が思い描く死神の様ですらあった。

「ブラックミストかね。珍しい、そして久しい、その能力を見るのもね」

聖獣は拍手し、彼を褒め称えた。見世物がそれなりに楽しめたからという様な、かるい調子。益々少年の怒りに油を注いだ。燃え上がるは必定。

「お前は……お前だけはっ！」

二体四本の腕が伸びる。が、霧を掴む事叶わず、闇に喰われていった。やがて聖獣の周囲にも暗黒が浮遊する。無数の昆虫がたかっている風でもあった。

「殺す！」

霧が聖獣に殺到。左半身を削ぎ落とした。

「殺す！」

右脚を食い潰した。

「殺す！」

胸部を器官ごと。

「殺す！」

右肩を骨ごと裂いて。

「殺……」

「満足、かね？」

少年の、闇に紛れた頭を、驚掴みにした何か。霧を掴んだ何か。それは聖獣の右腕であった。

肩も、無いというのに、その五指には確かに少年を静止させるだけの力がこもっていた。

「どう……して？」

「必然である」

じつくりと、少年の身体が持ち上がってゆく。頭を万力の様な指に挟まれ、十五センチの浮遊をした時、視線が正面で交差した。

「強者は何故存在するのか、分かるかね？ それは弱者を虐げる為に存在する」

聖獣は少年をバスケットボールが如く地に叩きつけた。

「我は常に強者なり、我以外全て弱者なり」

今度はサッカーボール扱い、容赦なく顔面に一撃が加えられた。もつともいずれもこの時代に存在しない代物であるが。

「お前はどちらか？ 決まっている、そう、弱者だ。私が主である以上」

いつの間にか、頭を踏みつけられていた。全身を、鋭くはつきりとした痛みが走る。あまりの激痛に、呼吸すらままならぬ。

「真理を理解した時、ヒトも眷属も割り切るのだよ。君も分かるかね？」

分かるはずもない。ともかく、少年の心を支配していたのは純粋な怒りのみであった。

何故殺した、何故父を母を兄を、人々を殺した！ その疑問と憤怒のない交ぜになった感情の支配、塗り潰し。

「エンシエント・セイントビースト……それが主の名である。少年よ、君に名を授けよう、主からの贈り物である。君は今日から“アサルトブラック”と名乗りたまえ、ヒトの時のものにもう意味はないのだから」

頭部に圧力掛ける脚が退く、と同時、聖獣は少年に背を向けて歩きだした。

げげほと咳き込みながらも、アサルトラックは身体を起こす。未だ痛覚が全身を支配していた。

「君はなかなか興味深い存在である。伸び代もその若さならば十分であろう、殺すのは実に惜しい。少しでも私の絶対性を揺るがせるものがあるならば、いつかの未来にまた会うだろう、さらばである」

「ま、待てよ……待て……」

「多忙である」

背中はずぐに見えなくなった。闇に溶け込んで消えたのだ。

「……エンシェント……セイントビースト……」

少年は呪いの様に繰り返した。

遠い遠い、昔の話。夢に溶けたあの日の記憶。いつにも増して、鮮明なあの瞬間。確かに彼はそこに居た。

6・薔薇色スピリッツ

「これは何？ ジョークにしては笑えないんだけど。ゴハンは？」

波音は、テーブル上の品を見るなりそう言った。固形物不在を嘆いての事である。

「俺達みたいな化物用のお食事さ。笑えねえのはな」

まあそう言うのも無理はないだろうな。テーブル上には、液体が並々とつがれた大型ビールジョッキが一つずつ。

ついさっきまで家族と鍋つついてた奴にやあ、単なる赤いジュース。タチの悪いジョーク、分かんなくてもないがこれは我々吸血鬼の唯一にして無二の栄養源、それ即ち……。

「アセロラドリンク？」

「せめてトマトジュースだろ。人工血液だ、分かるか血だ。人工物だから……まあ、養殖魚みたいなモンさ」

俺はわざと人工であるって部分を分かりやすく、強調したと思う。なりたての奴は、ナーバスになりがちだからな。

ヒトでなくなっただけという事実、そいつを受け入れられずにヒトであろうとする奴なんかは特に。

俺の知る限りでは、“それを口にしたら自分が終わる気がする”

なんて言って人工血液すら拒み続け、ついには精神に異常をきたし道行く人を襲い続けた奴が居た。

そうなれば最後、始末されるか生き延び絶望と自己嫌悪に蝕まれるか……。どちらにしろいい人生ではないが。

もう元に戻るすべがないなら、せめて人工物を口にしつつ波風たえずに生きて行くしかない。これが今時の吸血鬼なのだ。

「ふうん、なかなかクセになる味ね、美味しかったわ」

「って、もう飲み干しちゃったのかよ!? もっとありがたみを持っただな……」

「ありがたみ? 誰に、何に対してかしら? 人工なんだから原材料様にでも?」

「……もつともだ」

確かに。ヒトだって、牛さん豚さんに魚さんありがとう、だとか意識しているのはごく一部。ましてや人工牛さんクローン豚さん、養殖魚さんありがとうは、もつとあり得ないだろう。

でもどうあれ波音ちゃんの態度は、遠慮して変になるよりだいぶマシだ。むしろ清々しさすら感じる。

「しかしま、もう少し抵抗みたいなモン示すかなあー、なんて思ってたんだがな」

さっきまではヒトであろうとしてたしな、思い切り。意外には思

うだろ。

「今更あがいても仕方ない……私はもう戻れないって思い知ったから。それにもう、リアル血飲んでるわ。経験者よ私」

ああ、そうだったな。波音という女はもう吸血経験有り、つまりはこちら側の住人になってしまっているのだ。

それより、腹が減った。俺も目の前の液体を、一気飲みしてやった。本来ならばチビチビやる所だが、あんな景気いい飲みっぷりを見せられたのだ、変なプライドというか、意地というか、がな。

だが実際、その日その日をしのぐ程度ならば、血液僅か一滴かそこらでも保ってしまふ。吸血鬼とは案外、エコな生き物なのだ。

「なんだかさびしい食卓ね。口内もだけど、分とかからない食事時間は団らんを破壊するわ。もっとも、現状で団らんなんて望むべくもないのだけれど」

「なんだ？ 俺とお喋り楽しみたいのか波音ちゃん。こう見えて長生きだ、ネタはいくらでも……」

「遠慮するわ。それよりも、あなたも味覚は無いの？」

「まあ、そうだな。つつても食感の違いなら楽しめんだろ。因みに俺はワインが好きだ、血のように紅いやつがな」

吸血鬼には何故か、俺と同じく赤ワインを好む奴が多いと聞く。

吸血鬼の本能か代用品か、いずれにしる個体差があるから、味が好きてのも居るだろうな。

「ふう、食事はこれでおしまいだ。さっそくで悪いが仕事に行こうか」

「仕事……？ 何の事」

「ま、パトロールってヤツさ。こいつを真面目にやっといたらメシを食いつばくれる事もなくなる」

俺は波音を伴うと、玄関扉を開いた。外はもう、完全に俺達の間だ。

.

「さっきの話んだけど……パトロールってどういう事かしら、説明をお願い」

灯りも疎らな商店街を歩きながら、波音は言った。解けない問題の式と答えをねだる学生のよう……ああ、そっぴや女子高生だったか、見た目のせいかもしれない忘れちまう。

「ん？ パトロールはパトロールさ、見回りだよ。お前みたいにヤンチャの過ぎる同類が居ないかどうかの、な」

「……あなたは正義の味方様なの？」

「そう見える?」

「見えるわ。痛い感じのヒーローに」

痛い感じ………どういう事だか。

「大体わからないか? ま、さっきも言ったがメシの為だ。人間だって汗水垂らして働いて、報酬を得るよな。それと同じシステムだ」

アルバイトであるにしろ正社員であるにしろ、下請けであるにしろ本工であるにしろ。仕事の数だけ、見返りがある。

「いいか、吸血鬼なんてのはこの人間様の世界に於いて、単なる鼻つまみ者でしかないんだ。本当なら息してるだけでヴァンパイアハンターの連中に問答無用で殺されてもおかしくはない」

人間からすりゃ、化物だからな。そしてヴァンパイアハンターは、言葉通りの吸血鬼を狩る者。ヴァンヘルシングなんかが有名だ。

人間のクセに俺らとタメを張れる集団。中には半ヴァンパイアだとかクォーターも居るらしいがな。

「だから保護者と団体が必要なんだ。きちんと管理されてますって事だよ………ちゃんとした所属が、証明になる」

それが、あいつの会社な訳だが。しかし、よく考えてたものだな、ヴァンパイアを働かせるなんて。

それこそパワーを生かしたらレッカー車なんて不要だし、波音の能力も使いようによつては非常に便利だろう。労働力としては申し分ないのだ。昼間人間が働いて、夜間は吸血鬼が働く……理想的で労働基準を守った労働。

一昔の貴族様やらお偉いさんだったみたいなプライドの高い純血連中ならともかくだが、今は固体数自体も減っちまってなりふり構ってられない。

理由も分らず吸血鬼化した奴、俺みたいな貧乏パイアは寄らば大樹。ビビりなんだよ。

「ま、例え所属があつてもだ、人殺しをしちまえば警察より早くハンターが飛んでくる。どうやら俺の所属してるトコはデカイ企業らしいし、ハンター共も簡単に手出し出来ねえみたいだぞ」

「らしい、どうやら、みたい……まるで噂話が都市伝説ね。自分の所属している所の詳細も知らないのかしら？」

「詳しくは、な。つっても俺は給料さえ貰えりゃ不満はねえよ」

「呆れたものね……吸血鬼を労働力に使つてる時点でまともな団体の筈ないじゃない。労働時間は？ 賞与は、昇給は？ 保険はあるの？ キチンとしていないとマズイわよ」

「別にいいさ、今のところはな」

俺は少し声を落とし、いかにも俺にだって考えがあるぞ感を出し

てやった。ホントは現状に不満ないし、面倒くさいのもある。もつとも、人間と深く関わり過ぎればろくな事にならないからな。

「……そう、ならあと一つだけ。あの夜、私の前にあなたが現れたのは、単なる仕事だったのかしら？」

「……ああ。俺はな、ハンターに手を下される前の段階の吸血鬼を回収するのが仕事だからな。それで、面接するのさ、履歴書も作成してる。因みに波音ちゃんの場合は、犠牲者も全員元通りらしいし、引き渡しの義務も消えたそうだ」

一応、あいつからはそう聞いたが、この目で見た訳ではない。

不透明な企業、つてのは事実だしな。あいつにも連中にも未だ俺の能力を見せた訳でないからいざとなったら、つて奴だ。

「その節は、反省しているわ」

「気にするなよ、それよりも……」

それよりも……と、俺はさっきから鼻をついていた不快な臭気を払い、指差した。

その先に蠢く影一つ。陽が陰ったとはいえど、今夜は熱帯夜。とてもそんな格好ではいられない。

厚手のコートを羽織り、ニット帽にサングラス、マスク着用……どこぞで見た事のある銀行強盗寸前スタイル。そんな格好をした奴が存在している。

「ねえ、あれって……」

「恐らくな。さて、戻れるかどうかだが……」

俺は以前、俺に職質した警察官の様な気分で、もどき強盗の肩に手を掛けた。

7・鵜色ネクター

「おい、そのイカした兄ちゃん。このクツソ暑いのになんて格好してんだよ？」

俺は、厚手のコート越しに手を触れた。絡み付く様な粘着性のボイスを喉の奥から絞る。タチの悪い青年男性風なアレンジだ。

コート男はじつくりと、老人を思わせる動きで振り向いた。緩慢ながらどこか余裕ある動き、その目には紅の光が灯った。鬼の形相ならぬ吸血鬼そのもの。やはり俺のレーダーは大当たりだったと自画自賛。

鬼の口が歪む。よくぞ俺に気付いた、とても言いたげだ。瞬間、俺は右の手で石を作り振り抜いていた。先に動いたのはあっちの殺意孕んだ拳であるからだ。

だが、俺のは銃弾よりも速い！ 案の定、相手を追い越して爪を食い込ませ……伝わった感触、これは衣服だ。分厚いコートをひっぺがして、雑巾一丁。

奴は攻撃の最中にもバックステップを踏んで、こちらの射程からコート一重で逃れたらしい。

「ととつ……おいお前、分かってんだろ？ 自分はニンゲンじゃない何かって」

男はこちらの弾丸を見たにも関わらず、ニヤニヤと蛇みたいな笑

みを浮かべ体躯をぐぐつ、と沈める。身体のコントロールも良さそうだ、こりゃあ昨日今日のなりたてじゃあないな。

穴空きコート男はパチンコ玉の様に飛び出した。当然、俺はひよいとかわして……ひゅんと空気が鳴いた。奴とすれ違う瞬間から直後にかけて何も思いはしなかった。

が、見ればだくと俺の体液が滝が如く流出しているではないか！　んで、じたばたと俺の足元で暴れているのは肘から先だった。どうやら黄金の右を切り落とされたらしい。

「化物！？」

波音が悲鳴にも似た声で叫ぶ。が、心配してくれたのはいいが、せめてメノウと呼んで欲しい。化物で……誰だそれ、俺だけど。

俺は近づくなと吐く。言葉尻と敵の次撃は見事に重なった。カメレオンの舌でも、アリクイの舌でも到底かなわない手。コンマ零数秒の世界だ。

手刀は文字通りの刀か、左肩口に深々と突き刺さる。ネジられ、えぐられ、ついには骨まで断たれた。そればかりでない、筋肉や神経系統はクレーターと消え、だらんと垂れた。感覚も消え失せる。これで両手が駄目になった。

それで終わらず、さらには手を薙いで首筋を切り裂き、トドメとばかり最後には、奴のどの部分でもない奴の一部が俺の腹を貫いた。この、異物の侵入した感覚とは正に切腹だ。

俺の臓物はざっくりと切り裂かれ、背中から飛び出す刃先。空気と一瞬に赤が飛散した。速い、速い……。

奴は口を閉じたままだが、端は耳元にまで吊り上がっていた。愉快か嘲笑か、はたまた純粋な喜びなのか。

おや……刃物のようだと思ってたら、マジ刃物だったか。奴の手刀はナイフ状の刃に、もう片手は肘から先が脇差し程の刀に。そして俺の腹をざっくりしてるのが奴の腹から生えている巨大な包丁。

両手持ちの大剣“ツヴァイハンダー”でもここまでは無いだろう。刃物と肉体の境界もよく見えない。

奴がゆっくり一歩を踏み出す。刃は根元に向かう程太くなるというテーパーだから、より肉へ食い込む。ナイフ手が静かに持ち上がる。ああ、多分俺のデコを一突きにでもするつもりだろう。脳味噌はマズインだよなあ……。

まあ、これ位でやられ役も終了だ。能力はだいたい把握した、履歴書は完成したし後はこいつに……。

「化物から離れなさいな、化け物」

波音が静かに言ってた。ここは俺の身を最大限に案じて全力で叫ぶシーンの筈だがおかしいな、棒読み感すらあるぞ？

しかしこの女、用意周到と言わざるを得ない。何せ俺がぶしゃぶしゃどすどすとやられている時に、影を忍ばせていたのだから。瞬時に両サイドの壁面から、男の足元から一つの交点目がけニードルが突き出した。

不意を突かれた男は全身穴だらけ……とはいかない。素早さ、少なくとも俺を傷まみれとした身体能力は本物らしく、体操競技選手が涙目の華麗なバク転を披露し、波音ニードルを回避し切った。

「やれやれね。パトロールは犯罪を事前に防止する為の行為でしょう？ ガチナリアル犯罪者と対峙して生死のやり取りするなんて聞いてないんだけど」

「よくある事さ。もつとも、ここまでの困ったちゃんも久しぶりだな」

俺は痙攣しているかのようにピクピク蠢く我が腕をひょいと拾い、肘にぎゅっとねじ込んだ。繋がるのは、一瞬。食事の直後で本当によかったとつくづく思った。細胞は十分な血液により活性化していたから、回復も早い。

「きひひひひ、あんたらもご同類ですか？ 血をチューチュー吸って力に変える吸血鬼ってヤツなんですかあ！？」

敵が遂に口をきいた。声は想像していたよりも低く、爽やかさは程遠い粘着性を帯びていた。ってか、勘違い野郎かコイツ……。

「ええ、そうね。ご同類だわ。だけど同類の中にも優劣があるのよね、生物とゴミ屑を一緒にしてもらっても困るのだけけどね、ゴミ屑さん」

「なかなかの毒舌だねえカノジヨ。名前なんていうの？ ヤロウ

は殺すけど、あんたは生かしといてやっていいぜ?」

波音は返答さえせず、ちらりと横目で俺を見た。せめてすぎる様な目だとかなら良かったのに。いつもと変わらないそんな目なら、むしろ見下してるか睨んでいるかだが……。時々でいい、どうか弱みを見せておくれと呟く。

が、あれだな。ヤロウは殺すだとか聞こえたが。

「俺を殺すとはなあ……随分と大きく出たもんだ、若造さんよ。相手をよく見てよく知つとくべきだ、言つとくが俺はな、まだ本気出してねえし!」

「んー? あ、そう。因みに俺も本気じゃねえし。一気にやろうと思えばやれてたしな、弱っちい奴は吠えるだけ惨めだぜえ?」

吸血鬼はダイハードだがノスフェラトゥという訳じゃない。首をちょん切り、心臓に杭、それが確実かつ一般的な殺し方である。

ま、杭なぞなくとも、ニヶ所の司令室を同時に潰されたらマズイ。しつかりと前例ありだ。

「つたく、誰だよガキに鉄砲持たせたの……だから困んだよ、勘違い甚だしいからな!」

ガキに鉄砲、狂人に戦車、猿に戦闘機。危険性を理解しない奴に危険なものを与えちゃダメだぞつと!

だから危険性を分かる俺が、本気モードだ。それはアサルト・ブラックの二つ名にも例えられる、強力無比な能力であった。

俺のラインに沿い、黒色の粒子、つまりは細かい物体が飛び回り始めたのはすぐで、あっという間に蜂おじさんのなものになった。ほら、テレビでよく見る全身を蜜蜂で覆ってる人物風だって事だ。

霧の鎧を纏った俺は、悪いが一回を除いて負け無しなんだな！

跳躍。

放物線を描きつつ、一気に男へと向かう。ひとつ飛びだ。

敵も動く。俺の着地予定ポイントから身を離すと、両手の平から刃が伸びる。

着地した俺を二本で一突きとする形だ。だが、その意図は無効だ。

奴の能力はしいて言うなら……刃物リッパーといった所だろう。

なんでも身体のあるあらゆる場所から古今東西多様多様な武器を出せるらしい。そいつに吸血鬼の身体的能力が加わるとどうなる？ 連続通り魔なんてものじゃない、大量殺戮者がいとも簡単に出来る上がる。

さて話を戻し、二本の刃は俺を捉えられるのか？ 答えは絶対に不可、だ。霧の鎧は触れた先から、その物騒なエモノを消してゆく。

正確にはグライNDERの様に、触れた所から細かく削っている風だ。火花と音がしないだけ。そのまんまグイグイと右手を突き出してゆく。

やがて男の手を喰うか、というタイミングで霧を解除し、そのま
まの勢いで一撃！ 吸血鬼といえど、ぶっ、と不細工な声を発し倒
れた。

「波音ちゃん、頼むわ！」

俺の言葉に呆けていた彼女はすぐ、影を走らせた。俺の力はただ
の破壊、生け捕りなんて真似は困難であるからだ。

こうしてロープみたいに伸びた影は、男をぐるぐる巻きにして縛
り上げてしまったのである。

8・藤色シールド

触れる事がかなわない影がヒトを縛るなど、いい例の矛盾か、はたまた厳しい皮肉か。どちらにしろ、男は巻き付いたものをほどく事、不可能なんじゃないのか？　なんたるチートロープであろうか。

「クソツ、ナンだコレ、切れねええ！」

何度か影を突き抜け刃物が姿を見せはしたが、雲でも切るかの様だった。まるで黒い幽霊の様だなと俺は思った。

「終わりか。どうだ、波音ちゃんの影は。彼女ドSだからなあ、抵抗すればする程酷い目見るぜ！」

「ふふふふー、さあどこからちぎってくれようかー」

おつとお、波音ちゃんてば案外ノリはいいのな。とはいえ信じられねえ棒読みだけど。俺がいくら意識してもここまでならない。無機生命体、言ってみればロボだな。

ひでえ演技だけれども、捕まっている側は本気にしたのか、途端におとなしくなってしまうた。

「よおしよし、いい子になったな。んでオマエ、さっきから血の臭いがプンプンしやがるんだが、何人殺った？」

「殺ってねえ、殺ってねえよ、二人ばかりちよつと裏に連れ込んで吸っただけだ！　ま、まだ動いてたし殺してねえよ！」

「ふうん？　ならその前の日は、その前の前の日は？　合計で何人だ、ええ！？」

「ちっ、違っ、し、知らねえ、二人だけだってんだろ！」

「吸ったのは二人だろうが、お前さん随分と能力を使い慣れてやがるじゃないか、毎日能力に慣れる為に訓練していたとか言ったらマジで笑ってやる。そんなタイプじゃねえだろ！　躊躇いなんて無かった、殺す殺すと繰り返ししてたしなあ……ほら、ゲロっちまえ、試し切りで何人殺したのかと聞いてんだよ！」

右手にゆっくり、霧を纏わせた。俺に出来る限りの最大級の脅しである。さあて、これで喋るかどうかだが、多分口を軽くしてくれるとの確信はあった。不利になった途端、ビビり出したみたいだしな。つつてもこれ以上強情張るなら責任は持たない。

「べ、別にテメエには何の関係もねえだろ！　五人て言や満足か、十人て言や満足か！？　ンなモンいちいち数えてねえよ、お前らだって……」

「踏み潰した蟻の数を数えてんのか、とかかしらね。だとしたらベタすぎるわ、漫画の読みすぎかしらね？　……あ、因みにそう言ったセリフが浮かんだ私も漫画読みすぎだとかの誤解はしないで頂戴。小説は月二冊は読むけれどね」

「ほう、ちなみにジャンルは何を？」

「異世界転生トリップチートハーレム最強ファンタジーものかし

らね」

「そうか……なんか意外な……」

「冗談よ。あなたが読みそうもない、お堅い話ばかりだから」

そう言われると、ちよつぱり、本当にちよつぱりだがむつとする。こつ見えても多分、お前なんかより本は絶対読んでるし！

お前、解体新書の原本とか或いはネクロノミコン原本だとか読んだ事あんのか！？ あれらはな、ファンタジー小説みたいなもんだ、割と読み易いんだぞー、知らねーだろやーいやーいと脳内罵倒。ハイハイ、所詮俺はそこまでの人間……じゃない、吸血鬼さ。

「どーでもいいんだよお前らぁ！ お前らだつて人の一人や二人は殺してんだろが、能力に目覚めてよお、自分が変わった瞬間つての？ あれつてマジ最高じゃねえか、自分が自分じゃないみたいで……ホラ、今まで俺をバカにした連中とかぶん殴つてやりたくて当然だろ、あいつらとか俺に何してくれたか知つてんのかよ？ 放課後とかでも俺をパシリにするんだ、しかも俺の金だしなあ、ちよつとでも逆らつたらボコボコだよ親にも転んだでまかり通つたんだ、それで仕舞いさ。だから俺は力を惜しまなかった。一人刻んで二人刻んで、三人目は血を空つぽだ。俺の心配しなかった親父やお袋はアタマ西瓜みてえに力チ割つてやた、だけどこれは俺が責められんのかよ！？ 俺はガマンしてたし暴力に訴えた事は一度もなかった、あいつらが先に手を出して来たんだ。だから力が逆転したら関係も逆になんねえとおかしいだろうが、強い奴ア弱い奴を思い通りに出来なけりゃあおかしいつてんだよ！ 現に今お前らだつてそつうだ、俺より強いから俺を思い通りにしてんだ、違ふのかよ、俺は

悪いのかよ、こんな世の中が全部悪い……」

「屁理屈だな、そんなのは。弱肉強食、要はそう言いたいんだろ
テメエは。ここだ、頭ん中でよく考えろ、あの言葉の本当の意味
をなあ！ “強い者は弱い者に肉を食わせてくれる” 少なくとも俺
はこう好意的に解釈してるぜ。もう吸血鬼だってなあ、威張り散ら
すだけの時代は終わったのさ。何故か？ 肉を食い過ぎたからだ。
別にお前がこれから先どうしようが興味はねえよ、だけどな、食っ
てばつかだと待つのは滅びだけだ。いいか俺と波音ちゃんはな、一
応お前を助けに来たんだ」

勿論、いろいろやらかしたが嘘ではない。俺の役目はスカウトで
もあるのだ。片足から泥沼に浸かりかけてる勘違い野郎を持ち上げ
てやるとか、そんな役目。

実際問題、こういうものの放置は奴自身だけでなく俺達にまで余波
が来る。葉っぱが悪けりゃ根まで悪い思われてしまふ。だから末端
の仕業でもトップが謝罪するのだ。

そうだ一体の素行不良が燃料として投下され、ヴァンパイアハン
ターらの吸血鬼排除熱を高めてしまふ。俺達は生きているんじゃない、
生きる事を許可されている。それを自覚しないといけないんだ
よ！

「無駄だわ……」

波音が一言、影を落とす様に呟いた。

「思い通りにならなくて、力持った途端に憂さ晴らし？　しかも家族を手にかけた？　私に感情がなければ絞め殺してる所だわ」

影がじわりと動いたか、男の身体が波打つ。口から漏れた微かな悲鳴は真綿で首を絞められる人間のそれだった。

「この愚か者めが、私の影もお前を引き裂くと息まいておるわ……」

やっぱ、結構漫画読んでない波音さん？　それなんて多分、主人公の師匠か何かが敵として現れたら言いそうだし。だが、引き裂いちゃダメだ。俺は半ば諦めムードで泡吹き白目の男に対し、もう一度問うた。

「なあ……答えは九割九部出てるだろうが、一緒に来てくれないか？　信じてくれないだろうが、命の保証はしてやる。多分……。が、来ないならこの先お前に何が起きたとしても誰も知らない。お前はひっそり消えてゆく。一応、俺達は保護する立場だ」

ホント説得力の欠如した言葉だな、絞め殺す発言した約一名のせいもあって。だが、コイツが既に数件の事件を起こし、後悔が微塵も見られないというのなら……。

「冗談……だ、誰が……俺は、俺の、やりたい事を……」

だろうな。やむを得ない、残念だがこれ以上はコイツに関わってもロクなことなさそうだ。

「波音ちゃん、今すぐコイツを放してやってくれ。そして二度と

コイツに関わるな……何があってもだ」

「それは何故かしら、意味不明だわ。こんな下劣漢をまた街に放つたら事件が……」

「いいから。それにコイツはもう、二度と見る事もない」

波音は当分の間、怪訝顔でこちらを見ていたが、本当に当分疑惑の眼で見てくれていたが、影をやっとこさほどいた。破裂寸前までねじり上げていたのか、ヤツはしばらくゲホゲホしている。

「帰るぜ、波音ちゃん」

「……そうね。よくよく考えたらこんな奴、私の影を汚すだけだわね」

「わりいな……」

二人は、裏の奥深くへと消えてゆく。その背中を視界の隅で見送って、男はようやく立ち上がった。

自分は力持った者になれたのだ、なったのだ。その念が未だ彼を取り巻いている。ドン・キホーテは自身を戦士と信じ込み風車をボスに見立てたように、彼もまた己を正義とし世間を悪の権化と見なしたのか……。

「ちつ……くそつ、くそがつ！ あんなんが居るんじゃ、迂濶な真似出来やしねえ……」

最初の威勢はどこへやら、これが本来の彼であろう。爪を噛み思案にふける。彼にとつての正義を成す場合、如何にして目をかいくぐるか、そんな事でも考えているのだろつ。

だが、アサルトブラック、メノウが宣言したように……彼はもう終わっていた。病原菌には必ず白血球が対抗出撃するように。

「……………」

その者は既に、男の顔を睨んでいた。音もなく存在し気配すらなくたたずむ。さつき自らの実力の遙か上を体験した男にとって、恐怖でしかなかった。

「なつ、何だ……何見てんだよ……」

それが、彼の最後の言葉となった。彼の名前は安橋憲司。十九の少年で、元来おとなしい性分であった。

一瞬の後彼の心臓は潰れ頭部は胴から離れると、アスファルトの上にべちゃつと落ちた。直後に踏みつけられると、内容物を撒き散らし欠片となる。それで、十九年の人生は幕を閉じた。

「ああ、くそ、汚ねえなあ。撒き散らしやがって……これだからバケモノ
吸血鬼は始末が悪いんだわ……簡単に壊れてくれねえからよおお」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6590u/>

裏見忘レタ吸血鬼ガ表ヲ歩ンダラ

2011年10月10日14時57分発行